二〇二二年九月二三日

鶺鴒の遊べる川に鎌洗ふ　素秀
田を渡る風に稲穂の重さあり　うつぎ
砲台跡海を眼下に風は秋　ふさこ
古刹へと辿る長坂曼殊沙華　せいじ
露天湯に稲刈終へし顔そろふ　ひのと

二〇二二年九月二二日

吊り橋の影くつきりと秋の潮　あひる
水神の岩祠より秋の蝶　豊実
海峡を渡る車列や鰯雲　あひる
家並みの途切れ車窓に豊の秋　澄子
過疎の村生徒総出の落穂狩　みきお
膝で寝る犬の温もり秋寒し　かえる

二〇二二年九月二一日

泣くやうに艫綱軋む夜寒かな　ひのと
神杉の木漏れ日を浴ぶ曼珠沙華　明日香
日の高き一番風呂よ草刈女　なつき
木々あまた倒れ野分の置き土産　千鶴

二〇二二年九月二〇日

四つ目垣少し緩みて野分去る　たか子
突上げし指にとまりしあきつかな　素秀
祝はれて背筋伸ばせり敬老日　なつき
落人の道はこのへん花芒　むべ
一滴に味引き締まる阿波すだち　せつ子
夜行バス窓うつ秋の雨に覚む　素秀

二〇二二年九月一九日

賛美歌の声澄みわたる秋の空　あひる
秋蝶をしばし留めて旅鞄　ひのと
吠ゆるかに怒涛なす雲台風来　きよえ
女王の柩千草の花の蓋　せいじ
古希迎ふ敬老の日の初祝ひ　あられ
沖泊の船に灯ともる夜霧かな　ひのと
握り跡残る鍬の柄天高し　みきお

二〇二二年九月一八日

秋晴や駆けだしさうに靴ならぶ　ひのと
秋扇を天に翳して踊り果つ　ひのと
けだものの目鼻となりて茸狩　澄子

二〇二二年九月一七日

老舗宿備前の壺に千草活け　たか子
曼珠沙華さざ波寄する湖畔かな　みきえ
碑に停まりたるとんぼうの思慮深し　たか子
天高し足場積み上ぐ金属音　たかを
虫の音のリズムはいまし子守唄　きよえ

毎日句会みのる選・二〇二二年九月二五日